



K A P P A N O V E L S

長編推理小説

黒い、墜落機

ファントム

森村誠一

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。
なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 **黒い墜落機** ファントム

¥600

昭和51年2月25日 初版発行

昭和54年12月15日 27刷発行

著 者 もり 村 いち 森 村 誠 一

発行者 小保方 宇三郎

印刷者 堀内 文治郎

東京都千代田区三崎町2-18-11

堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347 電話 東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(板本製本)

表紙の模様・意匠登録 116613 © Seiiti Morimura 1976

(分)0-2-93(製)02286(出)2271 (0)

Printed in Japan

長編推理小説

くろ ファントム
黒い墜落機

「流星の墓」改題

もり むら せい いち
森村誠一



カッパ・ノベルス

黒い墜落機
目次

消えた流星	5
凶悪なサルビヤ	46
虫の警報	61
蟻螂 かまきり の抵抗	85
焼け爛 ただ れた花	110
骨肉の手紙	118
攻防の谷	134
欺瞞 ぎまん の愛	167
人非人 にんびにん の廃物利用	174
屈辱の代読	197
酸鼻なる墓標	209
苛酷 かこく なる別離	225
最後の客	238

イラストレーション

安岡

旦

消えた流星

I

昭和五十×年二月十×日午後、航空自衛隊中部航空方面隊司令部の置かれている埼玉県入間基地は、異常な緊張の中に置かれていた。

今日午後四時ごろ、茨城県百里基地より緊急発進した第七航空団所属のF-4F主力戦闘機が、交信を絶つてすでに三十分を経過している。F-4Fファントムは、F-104Jや、F-86Fの減耗あるいは老朽化にともない「新次防」に盛り込まれて装備された、最新鋭ジェット戦闘機である。

F-4FJは、全装備重量二十六・八トン、航続距離三千八百キロ、重装備の場合でも、一千キロをカバーする。複座で搭乗員二名、実用上昇限度二万二千メートル、最大上昇限度三万メートル、武装は、対地爆撃用に七ト

ンの爆弾を積載し、空対地ミサイル「スカイシャーク」(核弾頭装着可能) 四発を備える。

また空中戦用にレーダーホーミング・ミサイル「サンダーシュート」四発、「ドラゴンII型」四発を有し、どんな悪天候下においても出撃できる。高々度で、マッハ二・四のスピードを維持する抜群の性能を誇る新鋭機である。

航空自衛隊が、防空戦闘機の色彩の強いF-104Jからこの多用途型戦術戦闘爆撃機のパントムに徐々に切り替えを図っているのは、「その作戦構想を防空から戦術攻撃へ転換させたことをしめす明白な指標である」と警戒している軍事評論家もあるほどである。

ともかくこのF-4FJの装備によって、航空自衛隊の「戦力」はいっきよに増強されたことは事実である。

この虎の子戦闘機が一機、スクランブルで基地を出たまま消息を絶ってしまったのだ。行方不明機は417号機、搭乗員は、第七航空団百里派遣隊第1001飛行隊長大山弘二(おおくやまひろし)等空佐および沼田和市(ぬまたかずいち)一等空尉の二人である。

いっしよに発進した僚機の416号機は、すでに百里基地に帰還している。同機の搭乗員大野芳雄(おのよしお)一等空尉と平川正巳(ひらかわまさみ)三等空尉は、

「山梨県甲府市から長野県伊那市方面へ向かって、赤石山脈仙丈岳上空を高度八千八百五十メートルで編隊を組んで飛行中、積乱雲形の雲堤の中に突入して、激しい雷光に包まれた。必死に機を操り、伊那市上空へ抜けたときは、すでに47号機は見えなかった。雷雲の中ではぐれたとおもい、一万三千メートルに上昇してしばらく旋回したが、47号機は現われなかった。この間無線にも応答しない。無線機の故障ということも考えられるので、僚機を見失ったことを基地に報告して帰還した」と語った。

だが基地には、47号機はまだ帰還していなかった。F-4FJの航続距離は三千八百キロだから、まだ搭載燃料は十分残っている。しかし、全国二十四カ所のレーダーサイトを結んで構成されている自動警戒管制組織のいずこにも足跡を残さず、主力戦闘機が三十分以上も行方を晦ましていることは考えられない。

司令部を被った憂色は、しだいに絶望によって上塗りされていく。もはや、大山、沼田機の遭難は、確定的といっただけだった。

パッジ・システムの各レーダー基地は、コンピュータによって直結され、迎撃機と対空ミサイル網をコント

ロールしている。各レーダー基地は、一年中、昼夜のべつなく対空警戒を行ない、日本領空に接近する国籍不明機や未確認飛行物体を探知すると、各サイトの追尾計算機がこれを追うと同時に、ADDC（防空指令所）に連絡する。ADDCでは、中央迎撃計算機が一瞬のうちに敵か味方かを識別して、高度、速度、方向の計算をし、迎撃機が対空ミサイルのいずれを使うか兵器の選択を行ない、航空基地に出動を指令し、発進した迎撃機を目標物まで誘導、交戦、帰還まで自動的に管制処理する。

レーダー基地の表示機の前に坐って、ボタンを押すだけで、これらの解答がシンボルカラーによってしめされる。まさにボタン戦争を表象する恐るべきコンピュータである。

さらに新次防によって増強された三次元レーダーは、方位、距離、高度を一基で測定し、コンピュータと連動して数秒で機位を割り出してしまふ。

パッジ・システムに連なる各基地は符合伝送装置によって連結され、すべての情報は、上級司令部の設置してある三沢、春日、入間のADDC（防空管制所）および、府中のCOC（戦闘指揮所）に瞬時に集約される。

これまでの手動式管制では、一人の管制官が二機しか

管制できなかったのが、バッジ・システムにおいては、同時管制可能機数は、いっきよに十倍となった。また、侵入飛行物体を発見してから迎撃までの所要時間は手動式の十分の一に短縮され、迎撃の精度と誘導処理能力が大幅に向上したのである。

バッジの覆域は南朝鮮、沿海州、サハリン、南千島まで及んでいる。

一方、航空機がバッジ・システムと連動するためには、機上にデータリンク装置を搭載しなければならないが、F-4FJには初めから組み込まれている。これによって地上の迎撃計算機が、迎撃機に、最適迎撃姿勢を取るための速度、方位、進行方向を教える。

機上レーダーが敵影をキャッチすれば、あとはコンピュータが飛行コース、射撃時機を割り出してくれる。作戦を終了した味方機を基地まで誘導するのも、バッジ・システムである。つまり、バッジ・システムと連動する航空機は、釈迦の掌の上で暴れる孫悟空のようなものだ。地上管制網のバックがなければ、いかに新鋭の戦闘機でも盲同然となる。

これが突如として、バッジの網の目からどこかへこぼれ落ちてしまったのである。

見坊利道と水橋真紀子との結婚は、明らかに失敗であった。真紀子は、この人とはうまくいきそうにないということを、新婚旅行の宿で漠然と悟った。二人の新生活のスタートを記念すべき大事な夜というのに、利道は宿の部屋から母親に長々と電話をかけた。母親と話をしていると、心細くてしかたがないらしいのである。

見坊家の一人息子として、また将来、見坊商事の大屋台を背負って立つ御曹司として、腫れ物にさわるように育てられたため、すっかりスポイルされてしまったのだ。そんな相手と今日まで数年間、夫婦として暮らしてきたのは、新婚旅行中に、長男の利也を孕んでしまったことと、夫婦生活というものがよくわかっていなかったからである。

あの忌まわしい事件がなく、真紀子が反町重介にめぐり会わなければ、見坊利道の妻として耐え、当主夫人の座と、それに相当する財産を手に入れたかもしれない。

見坊利道と水橋真紀子の結婚は親同士がお膳立てした

見合いによるものであった。見坊商事はソックス業界の老舗で、最大手のメーカーである。婦人もの下着を中心に、最近では外衣や不動産業にまで手を広げてきた。

一方、水橋家は、箱根で古いホテルを経営している。そこへ利道の父、利平が外人バイヤーの接待ゴルフをして宿泊した折り、たまたまホテルに來合わせていた真紀子を見そめた。

当人よりも、まず父親のほうが無心になってしまい、ぜひ息子の嫁にと懇望して、見合いにまで強引に引張った。

水橋家としても、財界の実力者、見坊利平に娘の真紀子をそれほどまでに見込まれて悪い気はしなかった。地方の素封家にすぎない水橋家にとっては、考えられる最高級の縁談であった。

ちょうど真紀子が女子大を出たばかりのときだった。

最近、女子大生の常軌を逸した乱行や発展ぶりが、あまり珍しくもない世相になったが、真紀子は、まことに真面目一方の学生生活をすごした。周囲に男性のいなかったせいもあるが、旧家の奥深くに育てられて、あまり異性に興味をもっていなかった。

映画や小説に登場する燃えるような恋は、あくまでも

架空の絵空事で、自分には縁のない世界だと思っていた。だから、いきなり見合いだの、結婚だのと言われても、ピンとこない。周囲で両親や親戚の者が騒いでいるうちに、見合いの席上に引張られ出された。外見、特に相手に欠点も見つからないので、両親にまかせると答えると、バタバタと婚約がまとまって、あっという間に結婚させられてしまったというのが実情である。

たった一度の見合いで、これまで二十年以上も、人生のべつの軌道を歩いて來た二人が、わかり合えるものではない。だいいち真紀子は、相手の顔もろくに見なかった。言葉もほとんど交わさなかったようである。この場合、見合いは相手の一方的意志によってすすめられた。

利道は、真紀子の深窓の中で培われた藤たけた美貌に、一目で虜にされてしまった。後で聞いたことだが、見合いの後、もし真紀子が承諾してくれなければ、死んでしまふと言つて周囲を困らせたほどの執心ぶりであったそう。

それに対して真紀子は、特に断わるべき理由をもたなかった。——というより、よくわからなかったのだ。ちよつと見ただけであつたが、相手はいっしょにいて不愉快になるようなマスクでもなかった。両親がすすめてく

れた縁談だからまちがいないだろうという気持ちから、安易に承諾した。

自分の結婚に対する他力本願の姿勢が、長く悲惨な夫婦生活を強いられることになったのである。

真紀子は結婚して初めて、人間となった。その意志に忠実に従って自由に動くようになるまで、まだだいぶ時間の経過を待たなければならなかったが、とにかく人間として自らを意識したことは事実だった。

それまでの彼女は、水橋家の奥深くで、人生から遮断されて育てられた人形であった。恵まれた環境で過保護の垣に閉じこめられていたから、人生の荒海を自分の力で泳ぐ必要がまったくなかった。泳がないまでも、その波飛沫や風にも当たらないようにして、育てられていた人間として生を享けながら、人生からまったく遊離していたのである。

見坊家へ嫁いであら、彼女の女の人生ははじまった。それは小波一つたため温水プールから寒流の渦巻く暗い海に叩き込まれたようであった。極端から極端への移動であり、過保護の垣を完全に取りはらわれて、自分の力で泳がなければならぬ人生の海に置かれたのだ。彼女の人生航海への船出が、そのような寒流に向かってスタ

ートを切ったのは、不幸であった。

真紀子が人生の寒流の中に放り込まれたのを悟っても、ただちにそこから、脱け出すための努力をしたわけではない。冷たいと知覚しただけで、数年は、そこに漂流をつづけなければならなかった。

二十年を超える人形としての生活が、惰性になってかなり影響したのである。これではいけないとわかっていながらも、これまでつづいてきた軌道の方向を簡単に修正もできなければ、べつの軌道に乗り換えることもできない。

また結婚の初期は、利道の異常もあまり目立たなかった。男というものは、自分の父や兄弟しか見ていなかった真紀子は、利道に多少の異常性を意識しても、そんなものかと考えていた。

結婚して最初にびっくりしたことは、利道が、子供のころ遊んだ玩具を大切に保存していることであった。しかしこれは、まったくないことではない。幼年期の玩具を成長の過程の記念として、また過去を振り返るよすがに、おとなになってからも、とっておくケースは、あり得る。だが利道の場合、遊んだ玩具のほとんどすべてを集めているのではないかとおもわれるほど、膨大な量な

のである。それを宝物のように保存している。

利道は時折り、独りで自室に長い時間閉じこもることがあった。その間、だれも近づけない。結婚してからも宏壮な見坊邸の一角に、舅夫婦と同居の新婚生活だったので、古い召使いも数人いる。彼女らは、利道が閉じこもると、またはじまったというような顔を見合わせて、意味ありげに笑う。

召使いに聞いても、笑いにまぎらせるだけでおしえてくれない。いったい独りで部屋の中に閉じこもって何をしているのか？ 時折り部屋の中から、獣のうなり声や、子供の悲鳴に似た奇声が漏れてくる。

真紀子は気味が悪くなった。自分の夫がなにやら怪しげな奇病に取り憑かれたような気がした。

真紀子は意を決して、利道が閉じこもったとき、盗み見ることにした。同じ家の中なので、庭から近づけば、窓から覗ける。賤しい行為だとおもったが、夫の「奇病」の正体を突き止めたい好奇心が勝った。

ある土曜日の午後、利道は部屋に閉じこもった。だいたいいつもこの時間に、それははじまるので、真紀子のほうも準備していた。庭の一角に、「覗き」のための場所も用意してあった。視野に入った室内に進行していた

シーンは、彼女をあきれさせた。利道は室内いっぱい玩具をひろげていた。部屋の広さだけ玩具のレールをつなぎ、その上に模型の列車を走らせていた。列車といっしょに室内を走りまわりながら、子供のようには、手を叩いたり、奇声をあげたりしている。

次に、怪獣のプラモデルをつぎつぎに引っ張り出して、両手につかんで、「決闘」をはじめさせた。両手でつかんだ怪獣をもみ合わせながら、気に入ったほうを勝たせるのである。それはさながら五、六歳の幼児そのままであつた。

怪獣遊びに飽きると、すべての玩具を自分の前に整列させて、閼兵をする將軍のようなしぐさをした。彼は、事實いま閼兵をしていた。玩具は、彼の臣民であり、その部屋は、彼の王国であつた。

「玩具の閼兵」が、利道の楽しみであつた。

真紀子は見つからないうちにと、その場を離れた。利道は、まだ「子供」を抜けきっていないのだ。だから、玩具に囲まれていると、安心するのだろう。子供のころ遊んだ玩具もあれば、その後、買い足したものもある。玩具が、彼がいちばん信頼できる部下なのだ。

——可哀想な人——。

とつぶやくだけの余裕が、そのときの真紀子にはあった。夫が、『玩具エージ』から抜け出していないのなら、そこから抜け出させるのが、自分の務めだとおもった。夫が玩具と遊んでいるのは、自分が妻として、夫を惹きつけるだけの魅力に足りないからではないか。妻に傾きつくしてしまえば、玩具と遊ぶ余裕などなくなるはずだ——と真紀子はおもって、努力をした。

利道は、妻に興味をしめさなかったわけではない。興味がないどころか、新婚当初は、昼夜のべつなく挑みかかられて、真紀子は人の手前、ずいぶん恥ずかしいおもいをした。しかし新婚の夫婦というものは、どこも似たりよったりなのか、他人のほうから気をきかしたり、遠慮したりして、彼らを二人だけにするようにしてくれた。また昼間から夫に挑まれても、異常だとはおもわなかった。真紀子も、その程度の予備知識は備えていた。

だが、真紀子が夫を『独占』するために、いかに努めても彼の玩具遊びは矯^{なま}らなかつた。それは、どうも夫婦生活とはべつの次元にあるらしいことに、真紀子はようやく気づいた。

利道は、妻に不満があつて、稚^{おきな}い玩具を引っ張り出していたのではなかつた。それは彼にとって必要な要素だ

つたのである。成長した後も、彼の稚い部分が、原型のまま取り残されていたのだ。

「でも、子供が生まれれば、そんな遊びもやっていられなくなるわ。だって、玩具をみんな私たちの子供に取り上げられてしまうんですもの」

胎内に日々進行している幼い生命が、彼女に自信と余裕をあたえていた。いかに利道が母親コンプレックスで、小児的であつても、自分自身が父親になれば、その自覚と責任から、多少はしっかりしてくれるだろう。

——してもらわなければ、困るわ——。

真紀子は独りつぶやいた。自分の力ではないうにしても、現在、見坊商事の専務取締役として、いずれはその大屋台を引き継ぐ身分にある者が、いまだに母親の桎^{しご}梏から離れられず、『玩具の閹兵』をして悦に入っているようでは先がおもいやられる。

たとえ、自分の足で登った山ではなくとも、山の上で生まれた者には、生まれながらにして、山頂の酷烈さに耐え、広大な裾野^{すそ}を一望の下に納めるだけの器量を要求されるのである。

やがて月満ちて、男の子が生まれた。利也と名づけた母親似の、いかにも賢そうな子供だった。利道は、自分

のおもかげをまだあまり強く打ち出していない利也に、少し不満げであった。

父親よりも、祖父母のほうが喜んだ。

「これで見坊家の跡継ぎができた」

財界では強持^{こゝろ}ての利平が相好^{あうごう}を崩して喜んだ。ところが利道は、それがおもしろくない様子なのである。見坊家の御曹司の位置を、わが子に奪われてしまったような気がしているらしい。

よく、子供が、弟や妹が生まれて、両親の関心が、そちらのほうへ移ったとき見せる嫉妬^{とど}と、ほとんど同じような感情の動きを、利道はわが子の誕生においてしめしたのである。

——あきれたわ、この人、自分の子供にやきもちをやいている——。

真紀子は、そのとき、利道の本質の一端に初めて触れたとおもった。稚い部分が、おとなになっても残っていたのではなく、彼のすべてが稚いのかもしれない。幼稚な本質を、形だけおとなの体形と表皮で包んでいるだけなのでは?……

わが子の誕生と同時に、そんな疑惑を抱いたのは、不幸であった。

利也が、生まれても、利道の玩具遊びは、いっこうになおらなかった。なおるところか、ある日、真紀子を啞然^{あぜん}とさせるような事件が起きた。

そろそろ一歳の誕生日が近くなって、利也は家の中を所かまわず這いずりまわった。体重の軽い子ならば、よちよち歩きをはじめるところであるが、標準より重い利也は、立ち上がる気配をしめしても、自らの体重を支え切れず、またよたと坐り込み、そのままの姿勢で家じゅう、幼い侵略を企てる。

彼の行動範囲に、危険な場所はないようにしてあったが、それでも、真紀子は目を離せなかった。実際、子供は、いっどこでどんな危険に触れるかわからない。手当たりしだいに口に入れるので、手の届く所から小物は遠ざけ、刃物類はすべて「隔離」した。

それがあるとき、利也は部屋の片隅にうずくまって、しきりになにかモチモチしているのか、近寄ってみると、どこで拾ってきたのか、ヘアピンを家電器具の差込み口^{差し込み口}に突き込もうとしている。慄然^{りっぜん}として、ヘアピンを取り上げたが、気がつくのが遅ければ、感電したかもしれない。

利道の部屋には、例の玩具がいっぱい保存してある。

真紀子は利也のためにその玩具を「放出」してくれるように頼んだが、利道は、「こんな中古の玩具をあたえてはいけない。衛生的にも悪い。子供には新しいものを買ってやれ」と言った。

その言葉は、いちおうもつともなので、利道の玩具には手をつけなかった。

だが、子供は、親があたえた玩具よりも、自分が見つけたものをおもしろがる傾向がある。人工的なものよりも、道端に転がっている石ころや棒きれに興味をしめす。特に他の子供のもっている玩具を欲しがる。

利也には、この傾向が強かった。真紀子がいあたえてやった玩具には、ほとんど興味を見せないのだ。

「憎らしい子ったらありやしない」

と言いながらも、真紀子はそんなわが子が可愛くてならなかった。その利也がある日、真紀子がちょっと目を離れた隙に、夫の部屋へ侵入り込んだ。そこへは利也を入れることもかたく禁じられていた。

だが子供には、そんな禁止は通用しない。たまたまドアがうすく開いていたのに乗じて、父親の私室へ侵入り込み、そして例の玩具の蒐集集を見つけたのだ。利也は探鉱師が金鉱を見つけたような気がしたことであろう。彼

は父親の秘蔵の玩具を盛大に打ち撒けて、その真ん中で上機嫌で遊んでいた。

そこへ折り悪しく利道が帰宅して来た。彼は自分の王国が可愛い侵入者によってさんさんに踏み荒らされているのを知った。普通の父親ならば、その侵犯を喜んだはずである。だが、利道は留守中、自分の王国に進行した侵略を見て蒼白になった。次の瞬間、彼は、父親の玩具を従えて上機嫌にはしゃいでいるわが子に向かって突進した。

突然、上がったたたたましい利也の泣き声に、真紀子はびっくりして飛んで来た。彼女はそこに信じられない光景を見た。

「返せ！ それを返すんだ」

利道は、わが子が泣き叫びながら必死につかんでいる怪物をもぎ取ろうとしていた。

「あなた！ 坊やがそんなに欲しがっているんですから、一つぐらいあげてもいいでしょ」

真紀子が驚いてたしなめると、利道は凄まじい形相で彼女をにらみつけながら、

「うるさい！ あれほどおれの部屋にはだれも入れるなと言っておいのに、このザマは何だ。たとえ利也だろ

うが、おまえだろうが、この部屋へ入ることは許さん」
とどなった。そして利也の紅葉のような手から怪獣の
プラモデルを奪い取ると、その小さな身体を、毬でも蹴
るように足蹴にした。

利也はいっそう激しく泣きだした。

「まあ、あなた！　なんていうことを」

つづけるべき言葉を失って、真紀子が立ちすくんでい
ると、利道は、

「出て行け！　このうるさいガキを連れて出て行け」

と憎しみを剥き出しにして叫んだ。

真紀子は、そのときはっきりと夫の異常を悟っていた
が、妻として認められなかったのである。だが、わが子
に玩具箱を荒らされて激怒している夫に、どう避け得よ
うもない現実として、彼の異常を確認したのである。

3

この日を境に、利道の異常は、はっきりと打ち出され
てきた。

彼は、このころから妄想癖が強くなった。食器の置き
方一つにしても、被害妄想を抱く。たとえば熱い茶を入

れた湯のみを、いつもの場所よりも彼の身体に近い所へ
置くと、ここで茶碗が倒れれば、自分は火傷をする。

「おまえはおれが傷つくのを望んでいるな。いや、おれ
の死を祈っているんだらう」

とからむ。

出勤前に、お手伝いの靴の揃え方が気に入らないと言
って、何度も何度も揃えなおさせて、彼女を泣かせてし
まったこともある。

朝夕は、送迎の専用車が来る。いつもの通勤コースが、
水道管工事で通行止めになっていたことがあり、縁起が
悪いと言って、その日重要な会議があるにもかかわらず、
家へ帰って来てしまった。

出勤前や、旅行前に、衣服のボタンが落ちたり、食器
類を割ったり、ひもが切れたりすると、大変である。な
んでもないことでも自分に関係づけて、妄想に陥る。

そのうちに今度は、強迫行動が現われてきた。不潔な
ものに対する恐怖が極端に強まって、手を何度も洗う。
水道で入念に洗っても、水を停めるためにコックを締め
ると、そのコックに細菌が付いたような気がして、
また洗いなおす。コックを水洗してようやく手洗いに満
足したが、タオルで手を拭くと今度はタオルが汚れてい

たようにおもえて、またぞろ洗いなおしである。

したがって外出時は夏でも手袋を着用する。その手袋も、黴菌が浸透しないように二重三重に施すのだ。

休日に書斎に終日閉じこもって一心になにか書いていることがある。書斎はオフリミットではなかった（書斎で勉強するなどということはめったになかった）ので、後でそれとなく探ってみると、なんと彼は算用数字を1から順次、無限に書きつづけていたのだ。

これらの異常は、いっぺんに現われたわけではない。時間をかけてゆっくりと発現してきたのである。そのために、なおいに鼻が麻痺するように、真紀子も夫の異常に対して鈍麻していたと言える。

またこれらの強迫行動や症状は、一般の間でも程度の差はあれ、経験することがある。戸締まりやガスの元栓、電気のスイッチなど何度点検しても安心できないときがある。これも強迫体験である。強迫体験とは、正常と精神病のボーダーラインを揺れ動く精神状態の表現されたものである。

強迫体験と同時に利道は病的に嫉妬深くなった。彼にはもともと嫉妬深い性質が内蔵されていた。わが子を嫉妬したのも、その発現の一変形である。それが強迫体験

にうながされて増幅されてきたようなのである。

常に妻を疑惑の目で見るようになった。夫婦生活の陰悪化に反比例して、真紀子は成熟した女の美しさを打ち出した。夫よりもその父親が最初にホレこんだ天性の優れた素質が、夫婦生活によって磨きをかけられて、艶をましたのである。

夫婦の間に愛が存在しなくとも、男女の営みが、真紀子の女としての魅力を増したのは、皮肉であった。彼女の未熟な青い荳を育て絢爛と開花させた者は、利道であった。利道は、スターを育て上げたマネジャーのような気になっていた。そのスターは、マネジャーの許から逃げ出したがっている。

利道は、自分が手塩にかけて開かせた美しい花が、いまにも他の男に手折られそうな不安をおぼえた。いや手折られないまでも、自分の知らないところで、その濃密な花蕊を分けて甘美な蜜を吸い盗られているかもしれない。彼は、妻のなにげない言動まで疑った。ご用聞きとの、二言三言の会話にも、事務的な用事の電話一本にも、猜疑の目を光らせた。

「おまえ、なにもご用聞き相手に笑うことはないだろう。あの笑い方には特別な含みがあった。あのご用聞きとお